杉並の著名人に聞く Vol, 12

森 浩美さん

放送作家を経て、1984 年より作詞家として活動をはじめる。作品総数は約曲約 700 曲を超える。
現在は作家・脚本家としても活動。日本ドッジボール協会理事長。

▼一般財団法人 日本ドッジボール協会 HP
http://www.dodgeball.or.jp/

作詞家の素地は中学時代に

小さい頃は内弁慶な子どもでした。しかも小学校低学年の間は、小児喘息を患って学校をほとんど休みがち。それが 3 年生になり急に元気になりまして、当時の人気漫画『巨人の星』に憧れ少年野球を始めたんです。ポジションはピッチャー。色々な大会にも出て、当時は野球オンリーの毎日でした。
そんな僕でしたが、中学生の頃にギターを始めました。最初は曲のコピー（※ 1）を演奏していましたが、そのうち自分たちのオリジナル曲も演奏するようになって。その頃から僕は「詞」を書いていました。今の素地がたぶんそこにあるのかなぁ。当時から文章を書くことは大好きでした。

人生の転機はアメリカ留学

人生の転機がおとずれたのは、アメリカへ留学をしてからです。大学受験に失敗して親からは浪人をしても大学へとすめられたのですが、「4 年間執行猶予で遊ばせてくれるなら、そのお金でアメリカにいかせて欲しい」と説得。それでロサンゼルスに「留学」ならぬ「遊学」をしました。この 1 年間は僕の人生にとって有意義なものでした。映画を見たり、ライブハウスに通ったり、プロのテニスの試合を見たり。そうそう、イーグルス（※ 2）の解散コンサートも見ましたよ。留学時代にいい体験したような気がします。それが今になって非常にプラスになっていると思いますね。たとえば「青い空」って詞の中で書いたときに、西海岸・サンタモニカの " 青い空 " を知っているのと知らないとでは、読者に訴える力というのが違うような気がするんですよね。

ひょんなことから放送作家へ

帰国後、本気で大学受験に臨むために東京で一人暮らしをはじめました。そんなある日、仲良しの友人が放送作家・奥山てる伸（漢字は人偏に光）さん（※ 3）の弟子入りをすると言うので、僕も一緒について行くことに。その日、奥山さんと友人が弟子入りについて喫茶店で話をし終わった後、ふと奥山さんに目をやると視線が合ったんです。奥山さんから「お前も書きたいの？」と言われてとっさに「えぇ、まぁ」と思わず答えてしまったんですね（笑）。実は叔父の友人が文化放送に勤務していた関係で、僕も高校の時から文化放送に出入りしていたんです。といっても職場見学のノリでしたが。そんなせいで放送作家という職業に興味はありましたが、まさか、そのまま弟子入りするなんて（笑）。

作詞家への転向

結局大学受験はそっちのけになり、ズルズルと放送作家として仕事をするようになりました。下っ端の割には、それなりにやっていたと思います。
放送作家を 2、3 年やった頃のある時「この仕事は向かないのではないか」と思うようになったんです。何より両親に放送作家の仕事のことを伝えても理解してもらえない。そこで自分の名前が出て、仕事の内容が分かる仕事は何か？と思った時に「作詞」だと思ったのです。自己暗示欲が強いんですね。それからほどなく奥山さんに「作詞家になりたいんです」と正直に伝えました。怒られるかな、と思ったのですが、逆に先生は著名な CM プロデューサーを紹介してくれたんです。それからは一切放送作家の仕事をやめて作詞に専念していました。1984 年頃のことです。当時の目標は「3 年やってベストテンに入るようなヒットが出なければやめよう」ということでした。

「Dance Beat は夜明けまで」が大ヒット！

作詞家に転向して、僕の書いた詞がヒットチャートの 30 位、50 位ぐらいに入るようになりました。でもなかなか大ヒット曲はでなくて…。もうダメかな、と思いつつ 3 年目に入った 1986 年、歌手・荻野目洋子さんの「Dance Beat は夜明けまで」が初登場でヒットチャートの 4 位にはいりました。

それからは KinKi Kids や SMAP など超人気アイドルに詞を書く機会に恵まれ、それが次々と大ヒットしました。

脚本から商品企画、新人研修まで幅広く

作詞業以外にも脚本、漫画の原作、企業の商品開発、広告代理店などの新人研修の講師、それから子どもたちとその親を対象に、文章の書き方教室の講師などと色々なことをやらせてもらっています。

企業からは「新入社員に企画書の書き方を教えて欲しい」という依頼などが多いです。中には某菓子メーカーから、若手社員をアシスタントでつけるので、彼らを指導しながら新しいお菓子の企画をすすめて欲しいというものもありましたね。僕らが提案した商品は 2 年の間、全国発売になりました。その他にもご縁があり、いつくかの企業で商品開発の企画から携わらせてもらっています。でも、最近は小説がメインです。

杉並に暮らしていく魅力

アメリカ遊学から帰国後は武蔵小金井に住んでいましたが、1981 年頃に浜田山に引っ越してきました。

以来、一時期をのぞいてずっと浜田山近辺に在住です。物を書く仕事をしていますので、基本的に自宅が仕事場。だから環境はとても大切。僕は気分転換にフラッと近所を散歩したり、お茶を飲みにいったりするのですが、普段着でサンダル履きのままで出かけられるのもいいですね。

井の頭線沿線は静かでこじんまりしているところが気に入ってます。緑も多いので落ち着きますね。家族も浜田山がとても気に入っています。

日本ドッジボール協会について

ある出版社から「ドッジボール」をテーマとした連載漫画の原作を頼まれたのがドッジボールとの縁です。その後、発起人として「日本ドッジボール協会」の設立に参加、現在は理事長をやらせてもらっています。

色々調べてみると、ドッジボールには公式ルールがなかったんです。なので、ルールを作りました。1 チームを 12 人にしたところ、他の役員から「同じ学年で 12 人集めるのは大変です」と言われたのですが、「じゃあ、同じ学年じゃなくてもいいでしょう」と。昔と違い、今は上級生と下級生が一緒に遊ぶ機会はなかなかないですよね。そのせいで、社会に出てから上下関係に歪みが出る。兄弟がいたり、強い子、弱い子、いろんな人がいる。ドッジで、いい上下関係を疑似体験するのはいいのではないかと説明して納得してもらいました。

チームで上の子が下の子の面倒を自然と見ていたりするのを見ると「あぁ、続けてきてよかったなぁ」と思います。

※1 曲をテープ、レコードなどで聴いて、それを楽器で演奏すること。1970 年代にバンド演奏活動をしていた人はこの手法でギターのコードをコピーして演奏していた。

※2　1971 年にデビュー、世界的に人気を獲得した米国の 4 人組カントリー・ロック・バンド。

※3　大橋巨泉事務所に所属していた有名放送作家。「8 時だョ！全員集合」「11PM」などの人気番組の構成をしていた。

取材を終えて

森浩美さんといえば、SMAP など人気アイドルの作詞をなさっている方という印象が強く、私の中で「＝超有名人」。これは失礼のないように、と身構えていた。が、本人はいたって気さくな方だった！

最近の森さんはイラストレーターやクリエイターの育成、キャラクター制作、出版物等の企画プロデュース展開と以前にも増して幅広く活躍中である。

ドッジボールの話題になると生き生きと少年のように目を輝かせてお話される森さんは、とても 50 才とは思えない。これからも森さんは世の中にメッセージ性ある「言葉」を発信し続けられるのはきっとかわらないだろう。言葉の大切さについて、実感した取材であった。

―取材・執筆：高橋貴子、撮影：NPO 法人チューニング・フォー・ザ・フューチャー（取材・2010 年 11 月 27 日　掲載・2011 年 3 月 3 日）―